

平成24年度 第1回 公開フォーラム 参加者アンケート集計結果

	性別	年代	所属	感想	意見・要望
1	男	40代	医療機関	今回の演者に「募集会社」も参考に加えても良かったかなと思います。	論点の整理が重要だと思います。 ポータルサイトの目的が啓発なのか募集なのか、又は両方なのか？ 健常ボランティア募集なのか、患者募集なのか？ このあたりを明確にしないと何のポータルサイトなのか良く分からなくなると思います。(かえって混乱を招くこと 企業治験・医師主導治験などの種類によって、公開のし方が変わることはサイトにどう影響するのか…市民の 目・患者の目で考えてほしい。
2	女	40代	一般	臨床試験・治験に関するウェブサイトの取り組みが複数あるが、まだ一般には 検索しにくかったり、専門的すぎてわかりにくいものであると感じた。 今回作られるポータルサイトに期待したい。	
3	女	40代	製薬会社	一般から見た「治験」の考え(見方)が多岐にある事がよく分かった。	治験の中身をどう出されていくのか
4	男	60代	医療機関	治験参加率を増やすためには、被験者への金銭的サポートが必要と思われ た。	
5	女	50代	医療機関	現在あるポータルサイトを知ることができました。 が、「ここに行けば」というものに、まとまることができればよいと感じています。	
6	女	30代	SMO		どの製薬会社でどのような治験を行っているのか分かりやすく探せるサイトがほしい
7	男	30代	その他	公共機関が運営するHPであれば、あまりSEOやリスティング広告にこだわる必 要はないのかなと思いました。その費用はコンテンツに投資すべきだと思います	大阪治験webなど、分散している治験情報サイトを取り込んだHP、すなわちできるだけ「一元化」を実現している HPを国が音頭を取って作成して頂けたらなあ、と思います。
8	男	50代	CRO	情報周知の難しさは感じますね。	DBを意識した使いやすいものが望まれる 検索エンジンだけでなく、他のサイトからも誘導する方法も有効では？
9	男	40代	その他 (報道)	大変勉強になりました。 第2部1、2は分かりやすく、一方で第1部の中間発表は中間でもあるためか、や や説明が専門的でした。「国民のため、国民のみなさんが」などの表現が多 かったですが、目線がちがう感じがしました。	治験、臨床などそもそもの言葉のいいかえから検討するなど、目線をぐっと下げた方がよろしいかと。 素人なので感じました。
10	女	50代	医療機関 (CRC)	ポータルサイトのあり方もさることながら、COMLの山口さんの発表にもありま したが、CRCの役割を先ず始めにお話ししないCRCが存在することに驚きま した。	治験と臨床研究の違いについても現場で説明していきたいと思います。 よい学習会となりました。 ありがとうございました。
11	女	40代	製薬会社	ポータルサイトの活用状況、問題点を示していただき、弊社のサイトの構成も 見直しが必要と思われました。 また、勉強不足で、臨床研究ポータルサイトを利用させていただいたことがな かったのも、これから、使わせていただきたいと思います。	一般利用者にどのような情報が必要なのか。 難しいところもあると思いますが、参考にさせていただきたく存じます。 ありがとうございました。
12	男	50代	製薬会社	疾患によって知りたい内容が異なる、多様なニーズにどう応えるか。	
13	女	40代	医療機関	取り組みの主旨、方向性がわかって良かった。	各医療機関でもHPはすでに作成しているので、そういうものも巻き込んで頂きたいと思います。
14	女	40代	医療機関	大変役に立ちました。 現状、内容、演者の先生方のプレゼンテーションがすごくよく理解できました。 ありがとうございました。	国民、患者、医療従事者への認知度 活用しやすい 情報の内容の充実 を希望します。
15	女	40代	医療機関	情報とは、その受け手が誰か？によっても変わるものであるので一律に開示と いっても難しいと思いました。	
16	男	40代	製薬会社	参考になりました。	国民のセグメント(健常人、慢性期、ガン等)を分けた考え方が重要と思います。
17	女	60代	一般	一般市民の認識としては、“治験”という表現(言葉)だけで実験と重なる観念が あり、その部分を丁寧に安心感を提供できるようなわかりやすい説明あるいは 視覚効果を利用すること、やはり周知方法がキーワードになると思いました。 今日はどうもありがとうございました。今後、私自身も治験について参考にさせ ていただく部分が多くありました。今後、楽しみにしています。	臨床研究や治験を受ける側と依頼する側との信頼関係をどのように構築していくか、ナーバスになりがちな点、 治療効果を期待するなど、双方向性の関係にあるという目線について、更にふみこんでいただきたいと思います。
18	女	40代	医療機関	色々な立場の方とのコミュニケーションが必要だと思いました。	言葉のゆらぎは医中誌のシソーラス辞書をサイトに入れれば良いと思います。

平成24年度 第1回 公開フォーラム  
「一般国民が望む臨床研究ポータルサイトとは？」  
報告書

日 時：2013年2月10日(日) 13:00～17:00  
場 所：東京ステーションコンファレンス 6F  
対 象：臨床研究(治験)関係者および一般市民  
参加費：無料

主催：平成24年度厚生労働科学研究費補助金 医療技術実用化総合研究事業  
「一般利用者の視点に基づく臨床試験コンテンツ作成と  
ポータルサイト構築に関する研究」研究班 (研究代表者：有田悦子)

# 「一般国民が望む臨床研究ポータルサイトとは？」

日時：2013 年 2 月 10 日 (日) 13:00 ~ 17:00

場所：東京ステーションコンファレンス 6F 会議室

## オープニング リマークス

### － 研究班の取り組み紹介 －

『本プロジェクト発足の背景』	北里大学薬学部 薬学教育研究センター 医療心理学部門 准教授	有田 悦子 ..... 3
『臨床研究（試験）を巡る状況』	北里大学 北里研究所病院 臨床試験部 副部長	氏原 淳 ..... 7

## 第 I 部

### － 研究班の取り組み紹介 －

研究発表 1	『一般利用者の臨床試験・治験に対する意識調査』	北里大学 薬学部 薬学教育研究センター 医療心理学部門 助教	田辺 記子 ..... 13
研究発表 2	『一般利用者の臨床研究（治験）サイトへのたどり着き方および既存ポータルサイトに関する評価』	北里大学 薬学部 薬学教育研究センター 情報薬学部 助教	山崎 広之 ..... 21
研究発表 3	『臨床試験・治験の試験情報データベースに関するアンケート』	北里大学 北里研究所病院 臨床試験部 主任	渡邊 達也 ..... 28
研究発表 4	『一般利用者を対象とした臨床研究（治験）ポータルサイトに対するニーズ調査』	株式会社 QLife（キューライフ） 代表取締役	山内 善行 ..... 33

## 第 II 部

### － 講演 －

【座長：丁、星】

講演 1	『患者が求める治験情報』	NPO 法人 ささえあい医療人権センター COML 理事長	山口 育子 ..... 43
講演 2	『「臨床すすむ!プロジェクト」について』	国立循環器病研究センター 先進医療・治験推進部 部長	山本 晴子 ..... 49
講演 3	『「大阪治験ウェブ」について』	大阪府商工労働部 バイオ振興課	湯澤 真 ..... 58

## 第 III 部

### － シンポジウム －

【座長：有田、氏原】

講演 4	『一般利用者が求める臨床研究（治験）ポータルサイトとは？』	NPO 法人 パンキャンジャパン 理事長	真島 喜幸 ..... 71
シンポジウム	『一般利用者が求める臨床研究（治験）ポータルサイトとは？』		..... 82

本紙では敬称は全て省略させていただいております。ご了承下さい。

---

## 演者プロフィール

### 有田 悦子【研究代表者】

北里大学薬学部薬学教育研究センター医療心理学部門准教授。博士(臨床薬学)。北里大学薬学部卒業、東京学芸大学大学院修了。医療人を対象とした臨床心理・コミュニケーション教育の傍ら、臨床研究・治験におけるインフォームドコンセントのあり方、プラセボ効果など、被験者心理に焦点をあてた臨床心理学的研究に従事。臨床心理士・薬剤師。

### 氏原 淳【研究分担者】

北里研究所病院臨床試験部(現バイオメディカルリサーチセンター)副センター長。北里大学白金IRB事務局長。北里大学薬学部卒業。臨床研究・治験業務の実務作業の傍ら、ITによる業務効率化に取り組み、倫理委員会事務局業務の電子化、病院内会議のペーパーレス化などを展開。日本臨床薬理学会認定CRC。

### 渡邊 達也【研究協力者】

北里大学北里研究所病院臨床試験部(現バイオメディカルリサーチセンター)主任。東邦大学大学院博士前期課程修了。2002年せんぼ東京高輪病院勤務。2007年北里研究所病院にて臨床研究コーディネーターおよび事務局業務に従事。2012年より病院業務と並行し北里大学大学院にて医薬開発学を専攻し、実務とアカデミアの融合を目指す。

### 田辺 記子【研究協力者】

北里大学薬学部薬学教育研究センター医療心理学部門助教。博士(医学)。東京大学農学部・同大学院修了後、(株)ミツカングループにて遺伝子工学的技術を用いた研究・開発活動を行う。退社後、北里大学大学院医療系研究科修士・博士課程にて、がん患者、遺伝性疾患患者などの患者心理に関する臨床心理学的研究に従事。認定遺伝カウンセラー。

### 西端 芳彦【研究協力者】

北里大学薬学部薬学教育研究センター情報薬学部門准教授。博士(薬学)。1982年東京大学薬学系研究科博士課程中退、田辺製薬(株)入社。X線結晶構造解析、分子モデリング、研究情報管理などを担当。2006年より現職。

### 山崎 広之【研究協力者】

北里大学薬学部薬学教育研究センター情報薬学部門助教。2009年大阪大学薬学研究科修了。2010年大阪大学薬学研究科博士課程中退後、現職に就任。ケモインフォマティクスや統計解析といった創薬に関する研究と同時に、学生支援としてe-learningシステムの構築などにも携わっている。

### 星 佳芳【研究協力者】

北里大学医学部衛生学講師。1996年歯学修士。2002年医学博士。日本大学松戸歯学部卒業。1989年より東京女子医科大学歯科口腔外科。2002年日本医療機能評価機構「Minds」にてEBM事業担当。2006年国立保健医療科学院/情報デザイン室長。2011年より現職。

---

## 演者プロフィール

### 丁 元鎮【研究協力者】

大阪府立成人病センター医薬品安全管理責任者。武庫川女子大学大学院薬学研究科非常勤講師。京都薬科大学薬学部卒業。大阪府立羽曳野病院薬局、大阪府立病院薬局勤務を経て現職。1990年代半ばより日本でのEBM普及活動に携わる。1989年から通信ネットワークNifty-Serveにて医薬品情報フォーラムFDRUGのシステムオペレータを務めた。

### 眞島 喜幸【研究協力者】

パンキャンジャパン理事長。Ottawa University、UCLA School of Public Health卒業。Rand Corporationにて健康政策分析プロジェクトに参画。2006年に実妹を膵臓がんで亡くし、膵臓がん患者支援団体Pancreatic Cancer Action Networkの日本支部（パンキャンジャパン）を設立。現在に至る。

### 山口 育子【研究協力者】

NPO法人ささえあい医療人権センターCOML理事長。自らの患者体験から、患者の自立と主体的医療への必要性を痛感していた1991年COMLと出会う。1992年にCOMLのスタッフとなり、相談、編集、渉外などを担当。2002年法人化したNPO法人ささえあい医療人権センターCOMLの専務理事兼事務局長となる。2011年理事長に就任。

以上、研究班メンバー

### 山内 善行

株式会社QLife代表取締役。東京大学工学部都市工学科卒。ボストンの都市計画・商業施設開発コンサル会社を経て、1994年に株式会社カレンを設立、代表取締役に就任。2006年カレン会長に就任、株式会社QLifeを設立する。

### 山本 晴子

(独) 国立循環器病研究センター(国循) 先進医療・治験推進部部長。大阪大学医学部卒業。1991年より国循の脳血管内科レジデント。1995年スイス・ローザンヌ大学病院神経内科に留学し、1997年大阪大学医学部第一内科勤務。2000年国立医薬品食品衛生研究所医薬品医療機器審査センター勤務(新薬審査官)。2002年より現職。

### 湯澤 真

大阪府商工労働部バイオ振興課主査。東京理科大学大学院理工学研究科電気工学専攻修了後、キヤノン(株)にて工場自動化のための研究開発に従事。退社後、2011年より現職。大阪での治験促進、バイオベンチャーやものづくり中小企業などを対象とした医療機器相談窓口等、大阪のライフサイエンス振興に関わる施策を担当。

# 平成 24 年度 第 1 回 公開フォーラム 「一般国民が望む臨床研究ポータルサイトとは？」

東京ステーションコンファレンス 6F 会議室

2013|2月10日[日]

オープニング  
リマークス



## 本プロジェクト発足の背景

北里大学薬学部  
薬学教育研究センター 医療心理学部門 准教授 **有田 悦子**



## 臨床研究（試験）を巡る状況

北里大学  
北里研究所病院 臨床試験部 副部長 **氏原 淳**

第 1 部



## 一般利用者の臨床試験・治験に対する意識調査

北里大学薬学部  
薬学教育研究センター 医療心理学部門 助教 **田辺 記子**



## 一般利用者の臨床研究（治験）サイトへのたどり着き方 および既存ポータルサイトに関する評価

北里大学薬学部  
薬学教育研究センター 情報薬学部門 助教 **山崎 広之**



## 臨床試験・治験の試験情報データベースに関するアンケート

北里大学  
北里研究所病院 臨床試験部 主任 **渡邊 達也**



## 一般利用者を対象とした臨床研究（治験） ポータルサイトに対するニーズ調査

株式会社 QLife (キューライフ)  
代表取締役 **山内 善行**

『本プロジェクト発足の背景』

北里大学薬学部  
薬学教育研究センター 医療心理学部門 准教授

有田 悦子



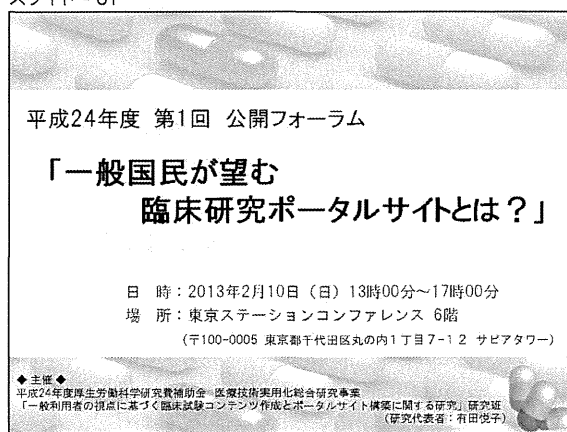
【スライド - 01】

皆様、こんにちは。連休の中日のお忙しい時期に、今日はありがとうございます。私、この研究班の代表をしております、北里大学薬学部の有田と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、こちらにございますように、第1回公開フォーラムということで、「一般国民が望む臨床研究ポータルサイトとは？」という大テーマを掲げまして、発表、またディスカッションなどを会場の皆様とご一緒にしていきたいと思っております。

こちらの研究ですけれども、ちょっとごらんになりにくいと思いますが、平成24年度厚生労働科学研究費補助金をいただきまして、医療技術実用化総合研究事業の一環として、一般利用者の視点に基づく臨床試験コンテンツ作成とポータルサイト構築に関する研究ということで行われている研究です。

スライド - 01



【スライド - 02】

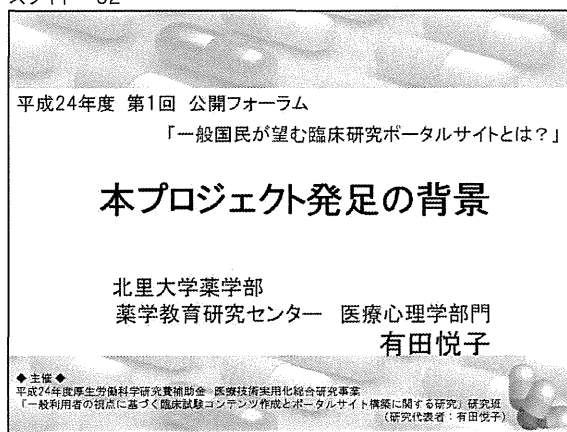
これからちょっとお時間をいただきまして、本プロジェクトの概要を私のほうから説明させていただきまして、順次、内容に入っていきたいと思っております。受付のほうでお配りさせていただきましたのがピンク色の封筒に入っております資料ですが、一部、第1部の一般成果発表のほうは、まだ中間途上のこともありまして、レイアウト、ハンドアウト、入っていないものもございまして、ご講演、シンポジウムのほうの資料等ございまして、そのあたり、順次ご案内させていただきたいと思っております。

では、早速ですけれども中身に入らせていただきたいと思います。挨拶ということになっておりますけれども、私の挨拶を兼ねたオープニング・リマークスということで、本プロジェクトの背景ということでお話をさせていただきます。

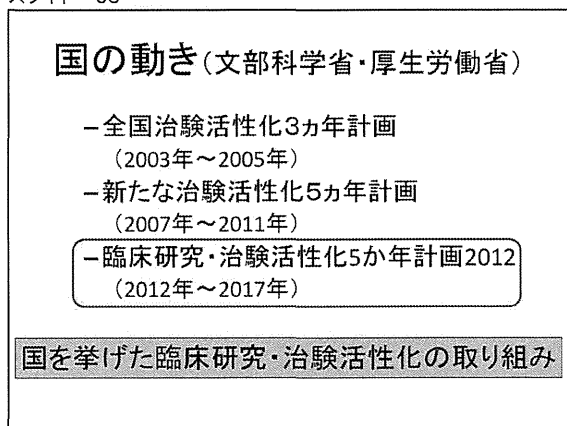
【スライド - 03】

先ほどお話をいたしましたように、この研究は厚生労働省の研究費補助金をいただいた研究となっておりますが、まず、いらしている皆様方、かなりお詳しい

スライド - 02



スライド - 03



方も多いと思いますけれども、臨床研究・治験をめぐる国の動きを簡単にご紹介したいと思います。

2003年から2005年にかけて、全国治験活性化3カ年計画というものが、文部科学省と厚生労働省の合同で実施されておりまして、後で氏原のほうからさらに詳しい話はさせていただきますが、日本で遅れがちな新薬の開発をどうやっていくかということで、国を挙げての活動が開始いたしました。また、続けて2007年から2011年、新たな治験活性化5カ年計画、そうしまして2012年から今後5年間を目指して、臨床研究・治験活性化5か年計画2012というものが、ちょうど昨年、掲げられました。

この分野、やはり日本は基礎研究は進んでおりますけれども臨床研究が遅れているということで、国を挙げて今後活性化をしていこうという取り組みが行われているわけです。

#### 【スライド - 04】

その中の治験活性化5か年計画2012として、平成24年、ちょうど1年前の3月に出されましたが、実施中の臨床研究・治験に関する情報提供ということで、今、いろいろな形で情報提供が行われていますが、まだまだ足りないということで、国民・患者が求めている情報を調査・検討し、我が国からのイノベーション発信の観点も踏まえて、さらに利用しやすいものとするという目標が掲げられました。

スライド - 04

#### 臨床研究・治験活性化5か年計画2012 (文部科学省・厚生労働省 平成24年3月30日)より

- (実施中の臨床研究・治験に関する情報提供)
- 臨床研究・治験の情報提供については、国立保健医療科学院の「臨床研究(試験)情報検索ポータルサイト」で実施しているが、さらに、国民・患者が求めている情報を調査・検討し、我が国からのイノベーション発信の観点も踏まえて、利用しやすいものとする。
- また、厚生労働省の「治験ウェブサイト」や医療機関や患者会等のウェブサイトを通じて、本ポータルサイトが広く周知されるよう取り組む。

#### 【スライド - 05】

国といたしましては、治験ウェブサイトというものの内容を充実し、一般の国民の方たちのアクセスが増加すること、そして臨床研究ポータルサイトへのアクセスが増加することというものを、国民・患者への普及啓発目標として掲げていたわけです。

スライド - 05

#### 臨床研究・治験活性化5か年計画2012 アクションプランより抜粋

##### 国民・患者への普及啓発目標

- 厚生労働省の治験ウェブサイトの内容を充実し、アクセス数が増加する。
- 臨床研究(試験)ポータルサイトへのアクセス数が増加する。

#### 【スライド - 06】

具体的な内容といたしまして、先ほども出しましたが、国民と患者をそれぞれ対象にしたニーズ調査や意識調査というものを実施して、その結果を踏まえて、国民・患者にとって利用しやすいポータルサイトを構築することということで、研究課題の募集がございました。実は2006年に、厚生労働省のやはり同じ研究班を主体とした意識調査というものが行われておりまして、そのころの臨床試験であるとか治験の認知度に比べますと、今は大分浸透が進んでいるとは考えられていますけれども、それが適切な情報収集とか提供に繋がっていないということもありまして、改めてニーズ調査から始めようということで、研究課題の募集があったわけです。

私ども北里大学が中心になって行っているのですが、もともと治験の臨床の場を持っているとか、あと学生に対しての教育を行っているということもあり

スライド - 06

#### アクションプランの内容

国は厚生労働科学研究費補助金による研究班等を設置し、過去に実施した調査に加えて、国民と患者をそれぞれ対象にしたニーズ調査や意識調査を実施し、その結果を踏まえて国民・患者にとって利用しやすいポータルサイトを構築する。また、厚生労働省の「治験ウェブサイト」や医療機関や患者会等のウェブサイト等を通じて、本ポータルサイトが広く周知されるよう取り組む。(※)

※研究事業名(年度): 医療技術実用化総合研究事業(臨床研究基盤整備推進研究事業)  
(平成24年度~25年度)

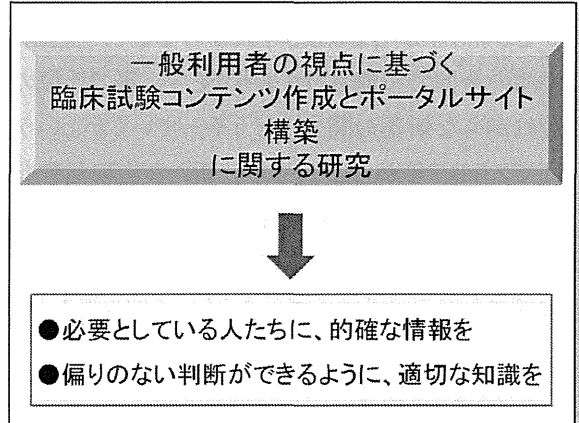
研究者名: 佐藤 元  
研究課題名: 国民・患者への臨床研究・治験普及啓発に関する研究

研究者名: 有田 悦子  
研究課題名: 一般利用者の視点に基づく臨床試験コンテンツ作成とポータルサイト構築に関する研究



まして、治験活性化の5カ年計画が始まったところから、ずっとこういう活動には取り組んでまいりましたので、ぜひ、この研究課題の募集があったときも応募したいということで、昨年応募させていただきました。おかげさまで、今、ウェブサイトを作られている国立保健医療科学院の佐藤先生と、2課題採択という形で、私どもの課題を採択していただきました。

スライド - 07



【スライド - 07】

今まで国の動きのほうを簡単にご紹介してまいりましたけれども、私どもは、研究課題としてもこのタイトル、“一般利用者の視点に基づく”というところを掲げさせていただいております。後ほどご紹介しますが、私どもの研究班メンバーは、教育の場であるとか、実際の医療の現場で働いている者で構成されておりますので、実際に研究のための研究ではなく、それが現場にすぐフィードバックできるようなことを目指してやっております。研究期間は一応2年間ということになっておりますので、その間、どのくらい達成できるかわかりませんが、大きな目標といたしましては、本当にその情報を必要としている方たちに的確な情報が伝えられるように、また伝えるための手段を整備すること。それから、ここは一番大事だと思っておりますが、今いろいろな情報が氾濫しておりますので、情報を手に入れたとしても、それが判断できたり、本当に自分にとってこれが必要なのかという選別ができないという問題もありますので、偏りのない判断が情報を手に入れた方たちができるように、まずは適切な知識を教育していきたいと、そういうことを大きな目標にしております。

【スライド - 08】

研究班メンバーでございますが、見ていただくと、本当にちぢんまりとしたメンバーでやっておりますが、私がおります北里大学の薬学部で、私とこちらの田辺は一応専門としては医療心理ということになっておりますので、患者さんの心理、臨床試験に参加する方たち、参加する可能性のある方たちの心理的なプロセスを研究テーマとして活動しております。こちらの氏原、渡邊ですが、北里研究所病院の臨床試験部で、現役の治験コーディネーター、臨床研究コーディネーターとして、またはそちらの実施・運営のほうに日々携わっている人たちです。こちらの眞島、山口でございますけれども、皆様ご存じだと思いますが、患者さんたちの団体のリーダーとして、本当に患者さんの視点からいろいろな情報発信をされている方々です。こちらの丁も、こちらにありますように、薬剤部で臨床試験にかかわりつつ、いろいろな形でITにも詳しく、情報発信をもう長年続けていらっしゃる先生ですし、星もさまざまな研究を主体的になさっている先生です。この西端、山崎ですけれども、こちら情報薬学というように、ITの専門家として、今回、ポータルサイト構築ということですので、やはり実際に、そのあたりの日々進んでいく知識について最前線の知識を持っているメンバーで構成しております。この二橋、ここにまた何人が加わってくるとは思いますが、今、スマホであるとかタブレットであるとかアプリであるとか、いろいろな手段が進んでおりますので、そちらの専門家もメンバーに入っております。やはり、こういう事業を進めていく上で事務局は本当に重要でして、事務局にもメンバーとしてしっかりと入っていただいております。本当に一般の方たちの視点にということで、日々研究を進めてまいりました。

スライド - 08

**研究班メンバー**

研究代表者	有田悦子	北里大学薬学部 薬学教育研究センター医療心理学部門
分担研究者	氏原 淳	北里大学北里研究所病院 臨床試験部
研究協力者	眞島喜幸	特定非営利活動法人 パンキャンジャパン
研究協力者	山口育子	特定非営利活動法人 ささえあい医療人権センター-GOML
研究協力者	丁 元鎮	大阪府立成人病センター 薬剤部
研究協力者	星 佳芳	北里大学医学部衛生学
研究協力者	西端芳彦	北里大学薬学部 薬学教育研究センター情報薬学部門
研究協力者	山崎広之	北里大学薬学部 薬学教育研究センター情報薬学部門
研究協力者	渡邊達也	北里大学北里研究所病院 臨床試験部
研究協力者	田辺記子	北里大学薬学部 薬学教育研究センター医療心理学部門
研究協力者	二橋大介	IT専門職-薬剤師
事務局	鈴木 葵	北里大学薬学部 薬学教育研究センター医療心理学部門

【スライド - 09】

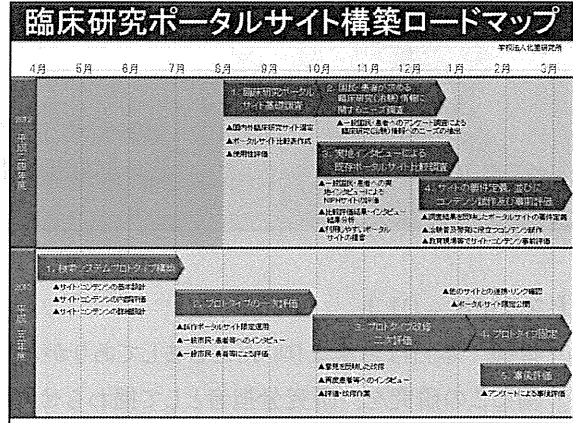
こちらがロードマップになりますけれども、実際の私どもの研究が認可されてスタートしたのが、昨年の実際は秋以降になっております。今日、これからご発表させていただく内容ですけれども、まず今の一般の方たちの、「国民・患者」のと書いてありますけれども、患者様の臨床研究・治験に対する意識であったりニーズが、何年か前の調査とどのように変化しているのか。それから、いろいろなポータルサイトが作られておりますけれども、どのくらい浸透しているものなのか。今、国立保健医療科学院のほうで、日本としては唯一挙げられているポータルサイトがございしますが、それがいわゆる一般の患者さんとか患者家族という視点で見たときに、どのくらい使いやすいものなのか。また、一般の方たちはそういう医療情報を集めるときに、どのようなキーワードでどのようなたどり着き方をしているのか。そのあたりを今まで、数カ月でございまして、調査をしてまいりました。今日は第1部としてその結果を、中間報告ですが、まず報告させていただきたいと思えます。

第2部以降、実際に今、大阪治験ウェブですとか、治験すすむくんですとか、いろいろな形で運営されているウェブサイトを、また患者会の代表の方にお話を伺って、では実際にどのようなものをこれから作ってあげようのかということのサジェスションをいただきながら、最終、第3部ですが、会場の皆様とディスカッションして、来年度に向けた、来年度プロトタイプの構築という作業に入りますので、いろいろなヒントをいただければと考えております。

【スライド - 10】

ですので、お時間、ちょっと盛りだくさんで申しわけないのですが、私のオープニング・リマークスはこれで終わらせていただきまして、早速第1部に入らせていただきたいと思えます。ハンドアウトのほう、そのまま引き続いておりますけれども、第1部、研究班の成果報告ですが、会場の皆様には専門の方もいらっしゃいますし、本当に一般の方もご参加いただいておりますので、今、私がダイジェスト的にお話ししたさらに背景、臨床研究（治験）をめぐる状況ということについて、研究班の研究分担者であります氏原のほうからお話をさせていただきたいと思えます。

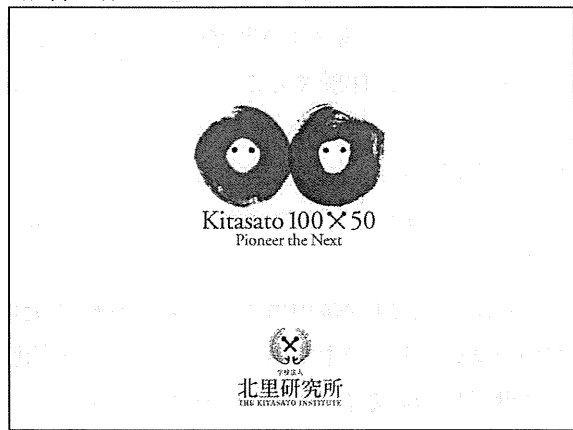
スライド - 09

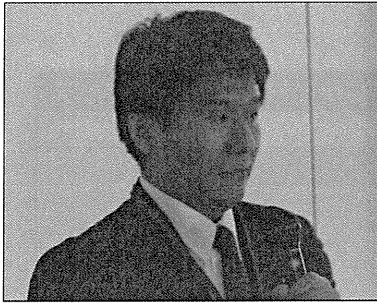


スライド - 10

時間	内容	講師
13:00-13:10	開会式	有田 淳 (北里大学学長)
13:10-14:20	第1部 平成24年度 研究班の取組の振り返り 1. 臨床研究 (治験) 全般の概況 2. 北里大学の臨床研究推進 (研究班メンバーより) 3. 一般市民の臨床研究 (治験) に対する意識調査 4. 一般市民の臨床研究 (治験) サイトの認知度調査 5. 一般市民の臨床研究 (治験) サイトの認知度調査 6. 一般市民の臨床研究 (治験) サイトの認知度調査	有田 淳 (北里大学学長) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官)
14:20-14:40	休憩	
14:40-15:40	第2部 1. 「大阪治験ウェブ」について (後) 2. 「臨床研究ウェブ」について (前) 3. 「大阪治験ウェブ」について (前) 4. 「臨床研究ウェブ」について (後)	山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官)
15:40-15:55	休憩	
15:55-16:45	第3部 1. 臨床研究 (治験) 全般の概況 2. 北里大学の臨床研究推進 (研究班メンバーより) 3. 一般市民の臨床研究 (治験) に対する意識調査 4. 一般市民の臨床研究 (治験) サイトの認知度調査 5. 一般市民の臨床研究 (治験) サイトの認知度調査 6. 一般市民の臨床研究 (治験) サイトの認知度調査	山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官) 山本 祥子 (国立健康増進センター 研究開発推進センター 推進官)
16:45-16:50	閉会式	有田 淳 (北里大学学長)

スライド - 11





『臨床研究(試験)を巡る状況』

北里大学 北里研究所病院  
臨床試験部 副部長

氏原 淳

【スライド - 01】

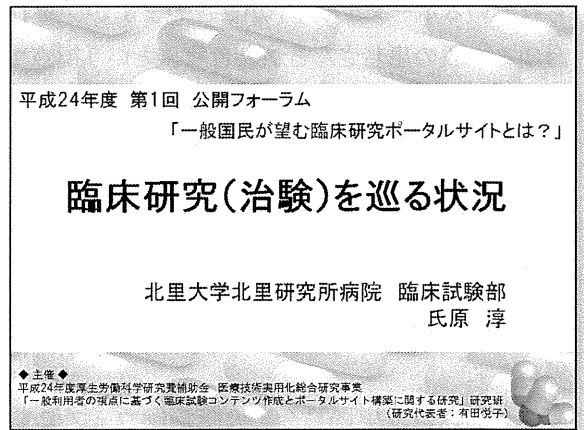
皆様、本日はお集まりいただきましてありがとうございます。北里研究所病院の氏原と申します。有田と一緒にこの研究を、研究分担者として携わらせていただいております。では、今、有田のほうからお話がありましたように、本研究を遂行する上で、今、日本で起きている問題、そして私たちが今やろうとしていること、どういったことで繋がってきているかということをご簡単に説明させていただきます。

【スライド - 02】

よりよい医療をより早く患者さんに届けたいということは、医療者や国民の皆様方が思われていることだと思います。画期的な新薬、あるいは有効な治療方法、いろいろな手術方法ですとか医療機器といったものが出てきて、今まで助からなかった命が助かる。そして、病で苦しんでいる方々の辛かった症状が改善される。そういったことは、私たちが医療をやっていく上で頻りに目にすること、体験することができることでもあります。ただ一方で、なかなか病気が治らない、治したくても治す薬がない、有効な治療法がまだないといったことで、苦しんでいる患者さんがいらっしゃることも事実です。

せっかく、ここ日本の中でいろいろな基礎研究によっていい薬のもとができていたり、例えばiPS細胞のように世界に誇れるような技術・研究が進んでいるのですから、そういったことを日本の中で臨床研究を進めて承認を受けて、きちんとした標準医療として進めていくということは非常に重要なことだと思います。そして、新しいもの、新しい技術を世の中で医療として使っていくためには、こういった臨床研究とか治験が必須である事を忘れてはいけません。しかし日本の技術が使われて、海外で先に新薬が出てしまうということも実際に起きております。せっかく日本で作られたものがあるのに、海外からそれを輸入して使わなければいけないという現状もあります。そういったことを何とかしていく。いい薬を早く届けたいという中には、臨床研究や治験ということを活活化しようという動きがあります。そういったことが今、日本の中でさまざまな取り組みが行われています。

スライド - 01



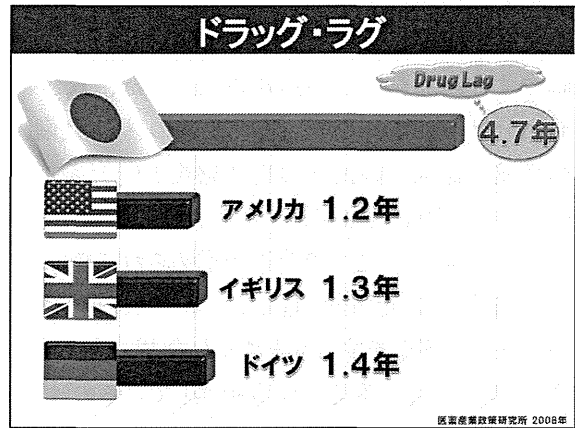
スライド - 02



【スライド - 03】

ドラッグ・ラグという言葉。もう皆さんご存じだと思います。これはいろいろな意味がありまして、日本がこれだけドラッグ・ラグがあるということは、いろいろところでアピールされておりますけれども、一般の国民の方々に知っている方は、日本はドラッグ・ラグって非常に長いんだと。どこかの他の国で実際に薬が承認されて、日本で使えるまでに約5年近くかかっているということは言われておりますし、実際、病気の領域においては、こういうことは非常に深刻な問題になっております。こういったことも改善していかなければなりません。

スライド - 03

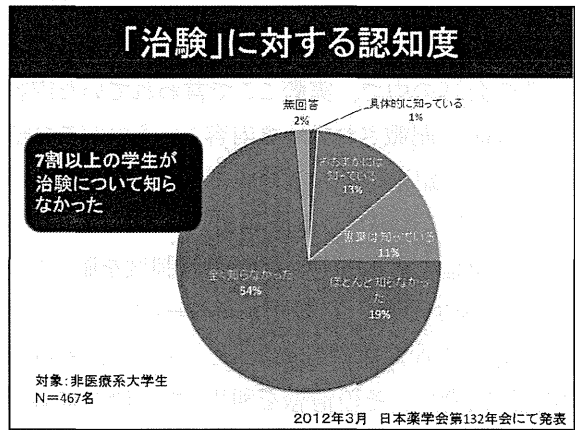


【スライド - 04】

そして実際に、では改善するためには、先ほどの臨床研究や治験ということを一一般の国民の方々によく理解していただいて、まずそのプロセスが進まなければなりません。そのためにはいろいろ啓発をしていかなければいけないと思います。

私どもが有田とともに調査をした結果でございますけれども、非医療系の大学生、約470名近くに聞いたところ、75%は治験という言葉を知らない、あるいはほとんど聞いたことがないという状態です。一回、病気になって、患者さんの体験、あるいは家族にそういった方がいらっしゃる場合には比較的、治験という言葉を知ったことがあるという方は結構増えてくるのですが、やはりこれから世の中を担っていく若い世代、そういった人たちにも、治験や臨床研究のことを啓発していけるような仕組みも必要だと考えております。

スライド - 04



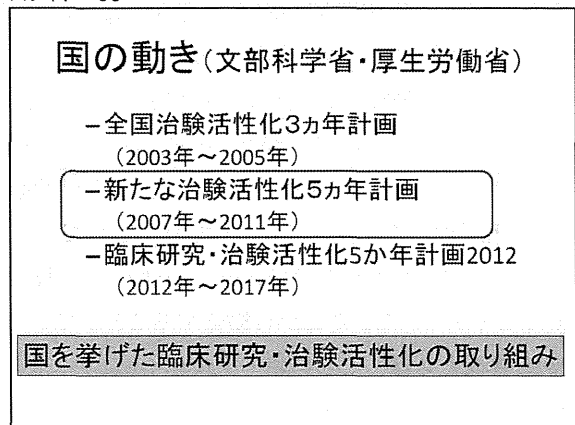
【スライド - 05】

先ほど有田のほうからも説明がありましたけれども、文科省と厚労省において、全国治験活性化3カ年計画というのが2003年から始まりました。これは実際、3カ年だったのですが、1年延びて4年実施されています。その後、新たな治験活性化5カ年計画が2007年から11年、そして昨年からまた5カ年計画2012ということで、新たな5カ年計画が施行されています。

実際、どうでもいい話なのかもしれないのですが、この5カ年計画と5か年計画の違いが、ここが片仮名の「カ」になっているのと、平仮名の「か」になっていること。微妙に違うのですが、これはちゃんと厚生労働省は使い分けています。

実際、国を挙げて臨床研究・治験活性化の取り組みということをこの10年間やっているわけなのですが、先ほどお話にありました、テーマになっているポータルサイトというのは、2007年から始まっている5カ年計画の中の取り組みの成果物でもございます。

スライド - 05



【スライド - 06】

実際、前の5カ年計画、片仮名のほうの5カ年計画ですけれども、こちらの内容としては、大きくこの5つに分けられています。医療機関の体制整備、人材の育成と確保、国民への普及啓発と研究参加への促進、そして効率的な実施・企業負担の軽減ということ、またその他ということで計画が進められてきておりました。当然、この計画が進んでいる中で、厚生省・文科省のほうで評価をするさまざまな会議が行われておりましたけれども、私たちが今担当しているのはこの部分ということになります。

スライド - 06

「新たな治験活性化5カ年計画」

(平成19年3月30日 文部科学省・厚生労働省)より

1. 医療機関の体制整備
2. 人材の育成と確保
3. 国民への普及啓発と研究参加促進
4. 効率的な実施・企業負担の軽減
5. その他

【スライド - 07】

その会議の中で、実際ここで言われていた内容、5カ年計画に記載されている内容というのがこの部分になります。臨床研究への参加を希望する人たちが安心して接することができる情報を確保して、一般の国民の要請を踏まえて臨床研究の登録制度を確立すること。それから、登録データベースのポータルサイト等を通じて情報提供されること。そして、それを利用する研究者も、その情報を利用して、研究の質の向上を図るということが記載されています。

スライド - 07

「新たな治験活性化5カ年計画」

(平成19年3月30日 文部科学省・厚生労働省)より

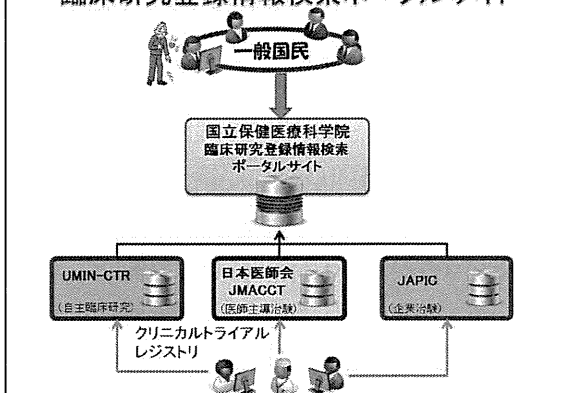
- ・ 臨床研究への参加を希望する人、必要としている人が安心して接することができる情報を確保し、「実施状況を知りたい」という一般の国民や患者の要請を踏まえ、国内で行われている臨床研究登録制度を確立し、臨床研究登録データベースのポータルサイト等を通じ、国民に情報提供されるべきである。
- ・ なお、研究者が類似の臨床研究を知ることにより、研究の効率化や、質の向上を図ることも可能となる。

【スライド - 08】

今そこに書かれていた、研究の登録するという話です。今これはほとんど徹底されているのですけれども、日本の中にはWHOで認めた、プライマリー・レジストリと言われる、臨床研究を登録するデータベースが3つございます。UMIN-CTRと日本医師会、あとはJAPIC、日本医薬情報センターというところにも登録システムがございます。それぞれ研究の内容によって、登録する偏りといいますか、傾向があるのですけれども、研究者は必ずこれのうちのどこかに、一定の条件を満たす臨床研究の場合は登録しなければ研究を進めてはならないということになっております。

スライド - 08

臨床研究登録情報検索ポータルサイト



この中に情報はたくさん詰まっています、インターネットから私たちがこれを見ることはできます。ただ、やはりこれは研究者のためのものであり、ある程度、医学的な知識、研究のスキルがないと、その中身がどういうものかということがわからない。要は一般国民のためのものではないということです。ですので、それをわかりやすくするというので、旧5カ年計画の中でポータルサイトというものを構築した。今これは国立保健医療科学院というところで設立されており、運営されておりますけれども、そこで、このデータを全部串刺しにしたような形でポータルサイトに引き上げて、そこで1つの画面からすべてのデータベースを見ることができる。そこから検索することができるような仕組みになっております。そして、一般の国民の方々や患者様たちは、ここのポータルサイトにアクセスすれば目的の情報を一元的に抽出して、どんな試験なのか、どこでやっているのか、どこに問い合わせればいいのかということがわかるはずになっております。

【スライド - 09】

実際の画面はこんな画面でございます。この後また報告が続きますけれども、実際この画面を使って一般の方々はどういう動きをするのかということも、私たちの今の研究テーマとしてやってまいりました。

【スライド - 10】

ただ、このデータベースの評判というものを、次の5年間、昨年施行された5か年計画の準備の段階の検討会で実際に出された意見です。例えば、「これは臨床研究のいわば専門家向けのサイトであって、一般の方々が見て自分に適した治験を探そうと思っても、非常に困難な状況である」と。厚生労働省のホームページの議事録からそのまま抜粋しました。「あのサイトで自分にぴったり合う治験を探し出せるとしたら、相当力量のある方になると思います」「実際の我が国における治験の状況を把握できるようなアクセスしやすいポータルサイトを、もう少ししっかり構築したほうがいいのではないか」。他にもいっぱい意見があったのですが、抜粋して載せさせていただきました。実際、こういったことを踏まえて、今の5か年計画というものができたということになります。現行のポータルサイトはおおむね不評です。私たちの専門のスタッフからも不評です。ただ、それをたたく意味ではなく、それをよくしようというのが私たちの取り組みということをご理解ください。

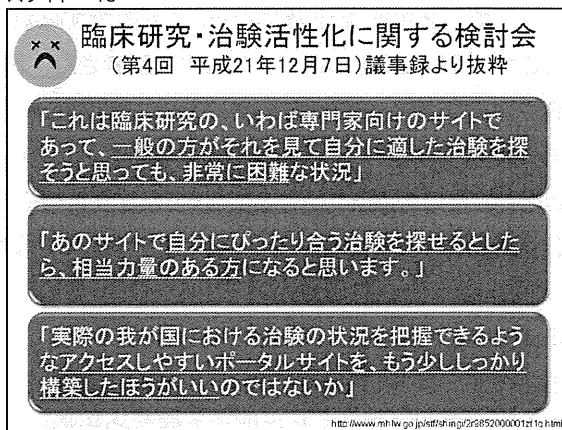
【スライド - 11,12,13】

そして今回の5か年計画、平仮名のほうの5か年計画では、実際にその部分、やることはたくさんあるのですが、その中の一つに、国民・患者への普及啓発というものがございまして、その中に記載されている内容が、今、国立保健医療科学院のポータルサイトの取り組みのように、国民・患者が求めている情報を調査・検討し、我が国からのイノベーション発信の観点も踏まえて、利用しやすいものとするということです。そして、そのポータルサイトを広く周知されるように取り組むということで、先ほど有田の説明にあった、科研費事業としての公募があったということでございます。

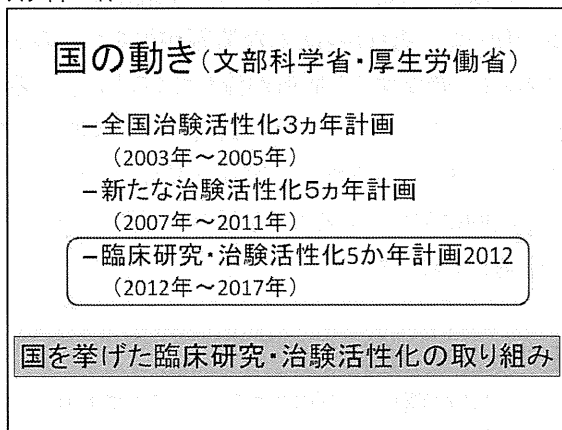
スライド - 09



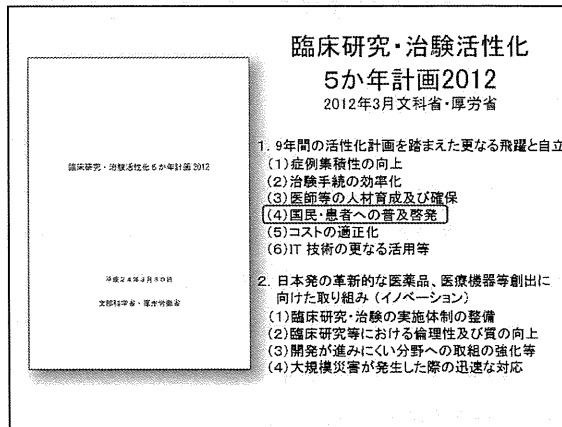
スライド - 10



スライド - 11



スライド - 12



【スライド - 14】

そして私たちが、これをやらせていただく事になりました。そして、最終的にどんな形に持っていくといいのかということ、実際には来年度、継続することが決まったら実際の作業に入っていくと思うのですが、今あるポータルサイトがなぜ使いにくいのかということ、きちんとして、そして一回、ここから直接アクセスする前に、何か玄関みたいなものを使って、患者さんの言葉で患者さんの思いをそこに入れることで、うまくそれを翻訳して、ここからデータを引っ張り出してあげられるといいのかなとも考えています。

そして、2次的な作業になってくるのですが、ここでこういったものにアクセスする患者さん、国民の皆さんの気持ち、要は有田が心理学の専門という話もあったのですが、その気持ちを踏まえて、この人たちはどうしたいのかということにうまくどり着けるような仕組みも作っていきなさいと考えています。

例えば、他の患者さんはどう思っているのかとか、あるいは、それをどこの病院に行けば受けることができるのか。製薬会社はどういった情報を出しているのかとか。あるいは、それに関する病気や治療の情報というのはどこにあるのか。タブレット端末やスマートフォンを使って、それからどんな情報が得られるのかとか。あるいは、登録すると情報が流れてくるとか。いろいろ、想像すると出てくる。今回の研究テーマはあくまでもこのポータルサイトなのですが、そういったことも2次的に利用できるような繋がりを広げられるといいなと考えております。

【スライド - 15】

今、ITの環境って非常に変わってきておりますので、そういった環境の変化に伴って、私たちもそれに合わせたポータルサイトを構築していきたいと考えています。

【スライド - 16】

一方のネットワーク、患者さんと情報だけを繋ぐだけではなくて、その情報をうまく利用して、ポータルサイトだけではなくて、ソーシャルネットワークサービスですとか、双方向性を持たせたような仕組み。あるいは今ここに、DIPEXというマークがありますけれども、被験者の、がん患者の語りというものが、オックスフォードから始まったものが日本でも実際動いていま

スライド - 13

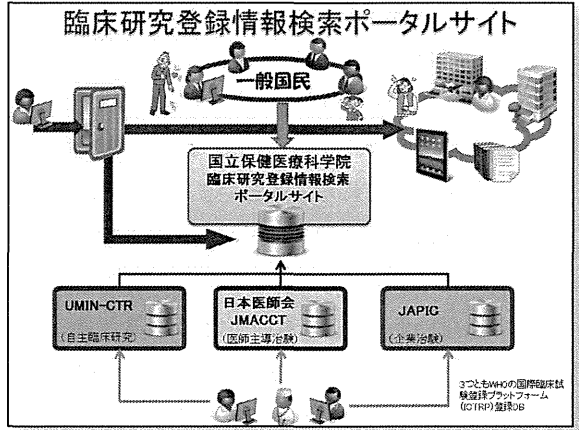
**臨床研究・治験活性化5か年計画2012**  
 (文部科学省・厚生労働省 平成24年3月30日)より

(実施中の臨床研究・治験に関する情報提供)

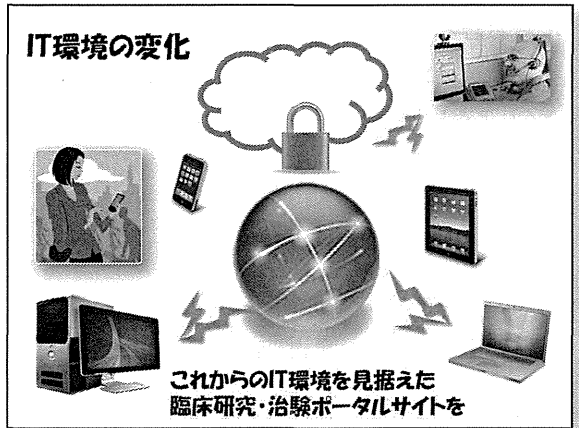
○ 臨床研究・治験の情報提供については、国立保健医療科学院の「臨床研究(試験)情報検索ポータルサイト」で実施しているが、さらに、国民・患者が求めている情報を調査・検討し、我が国からのイノベーション発信の観点も踏まえて、利用しやすいものとする。

また、厚生労働省の「治験ウェブサイト」や医療機関や患者会等のウェブサイトを通じて、本ポータルサイトが広く周知されるよう取り組む。

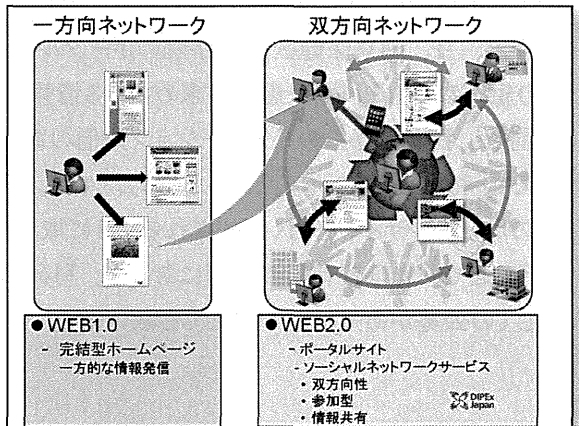
スライド - 14



スライド - 15



スライド - 16



す。実際、臨床試験の被験者の語りというものも、今、構築しております。それも有田と私のほうも携わっておりますが、そういったことともうまく繋げるといいますか、情報共有ができるといいのかなと思っております。

【スライド - 17】

日本の今後の治験の活性化政策というのは、ここに書かれているようなことをやっていながら日本の医療水準を上げるということ、それから日本で生まれた医療技術を、日本から発生させるイノベーションとして、産業としても世界に発信できるような、そういったことに繋がっていく一つを私たちはやらせていただいていると思います。

【スライド - 18】

これができるということは、結果的には、患者さんも製薬企業も医療者も、そして政府も、みんながハッピーになれるような仕組みというのを作っていきなるといいます。以上です。どうもありがとうございました。

スライド - 17

日本の治験関連政策

- ・ 日本国民に必要な医薬品等を迅速に届ける
- ・ 日本発のシーズによるイノベーションの進展・実用化
- ・ 市販後の医薬品等のエビデンス構築

日本の医療水準の向上

日本発のイノベーションを世界に発信

スライド - 18

コンセプト

みんながHappy!





## 『一般利用者の臨床試験・治験に対する意識調査』

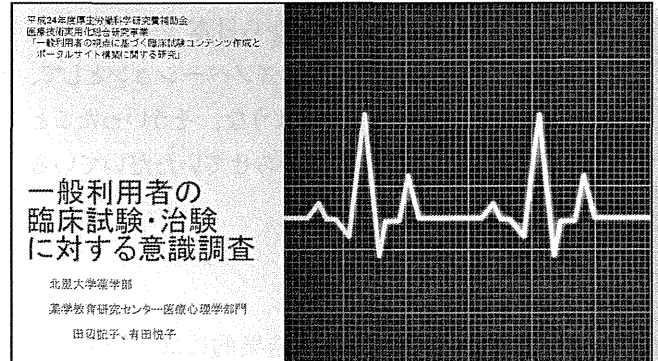
北里大学 薬学部  
薬学教育研究センター 医療心理学部門 助教

田辺 記子

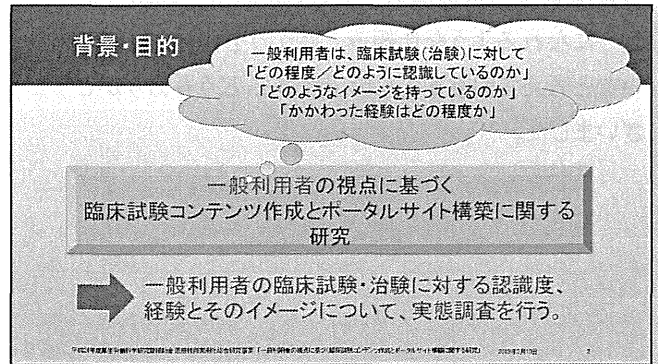
## 【スライド - 01,02】

よろしくお願いいたします。私からは、一般利用者の臨床試験・治験に対する意識調査ということでご報告をさせていただきます。本研究班の研究課題のタイトルが、“一般利用者の視点に基づく臨床試験コンテンツ作成とポータルサイト構築に関する研究”ということになっておりますので、まずは一般利用者というのは、医療者ではない方々かなとは思いますが、一般的な方々、今回ですと、ネットの利用者という形でっておりますけれども、そういった一般国民の方というのが、臨床試験や治験に対してどういった認識をしているのか。どの程度、どういうことを考えているのか。また、どういうイメージを持っているのか。また、例えばその方たちはどの程度、臨床研究等に参加しているのかといったような実態調査ということが必要なということを感じまして、一般利用者の臨床試験・治験に対する認識度、経験、そのイメージというものについて実態調査を行うことといたしました。

## スライド - 01



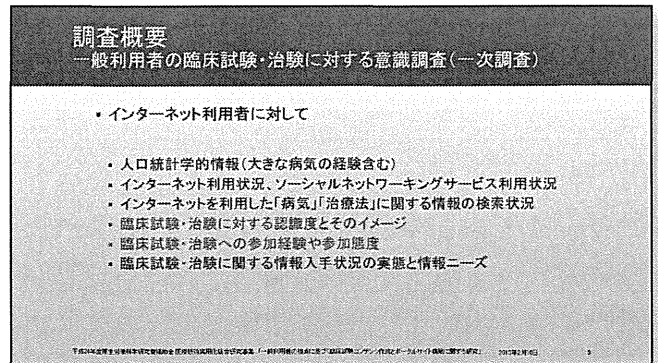
## スライド - 02



## 【スライド - 03】

今回の調査の概要です。後ほど2次調査の結果もご報告させていただくのですが、今回、1次調査としては、インターネットの利用者に対して、一般的な人口統計学的な、大きな病気の経験等を含む情報。性別・年齢ですとか、そういったもの。あと、ネットの利用状況といったもの、あと臨床試験・治験に対する認識度とそのイメージ。参加の経験や、参加についてどう考えているか、また、臨床試験や治験に関する情報というのはどのように今調べている方がいらっしゃるのか、ということ調査いたしました。今回の私の発表では、こちらの認識度とそのイメージ、あと参加経験、参加態度というところに焦点を当ててご報告をさせていただきます。

## スライド - 03



【スライド - 04】

今回の調査の対象者ですが、インターネットの一般利用者の方1,000名を対象といたしました。性別は男女大体半々ぐらいになっております。職業に関してはこのようになっております。医療従事者も中には含まれております。会社員、専業主婦、パート・アルバイトという方が多いという形になります。

また、大きな病気の経験のほうは、自分で大きな病気をしたことがあると思うという形で聞いておりますので、経験したことがない方が7割ちょっと、過去に病気の経験がある方が2割、現在も病気が何かあるという方が、ちょっと少ないですけども50人弱という形になっております。また、家族や身近な人での経験も聞いておまして、これも大体同じような比率になっております。こういった方々を対象として調査を行っております。

スライド - 04

方法: 対象者		n	Mean±SD
インターネットの一般利用者 1000名	性別	男性 女性	519 481
	年齢		44.4±14.3
職業	会社員	334	
	専業主婦	179	
	パート・アルバイト	129	
	無職	105	
	自営業	76	
	公務員	60	
	医療従事者	44	
	学生 その他	39 34	
大きな病気の経験	ない	739	
	過去にあった	226	
	現在もある	35	
家族や身近な人の大きな病気の経験	ない	683	
	過去にあった	270	
	現在もある	47	

【スライド - 05】

調査方法といたしましては、インターネット調査を行っております。Qlifeのほうに調査実施を依頼しております。調査対象者の選定ですが、20歳未満の方を除く形で、日本の総人口からネット利用者のネット利用率を掛け合わせまして、振り分けている形になっております。

スライド - 05

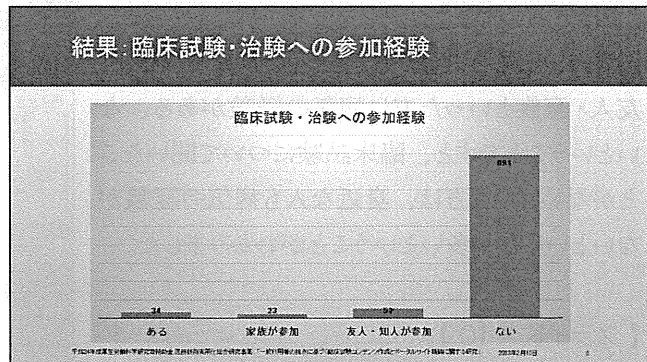
方法: 手続き

- 調査方法: インターネット調査(株式会社Qlifeに調査実施を依頼)
- 調査対象者の選定: 日本の総人口(総務省、人口推計(平成24年3月確定値))に、各年代・性別ごとの「ネット利用率」(総務省、平成23年通信利用動向調査)を掛けあわせ、その人数と同じ構成比で1000人を割り付け。(ただし20歳未満は除く)
- 調査時期: 2012年9月

【スライド - 06】

こちらのほうから実際の結果になりますけれども、臨床試験・治験への参加の経験はありますかという形で聞いたところ、全体の約9割の方が、そういう経験はないというお答えでした。自分自身が参加した方が34名、家族が参加した方が23名、知っている人が参加したことがある方が50名程度という形になっておりました。ほとんどの方がないと答えていただいております。

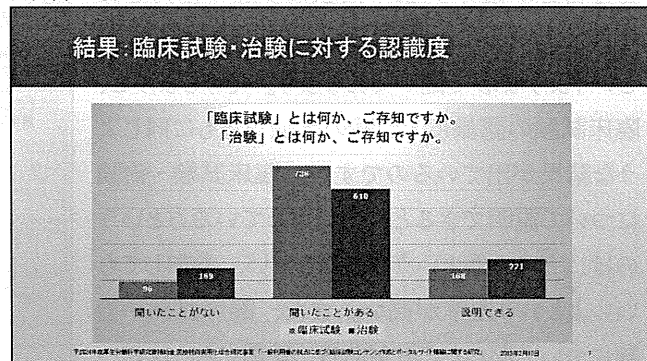
スライド - 06



【スライド - 07】

また、臨床試験や治験に対する認識度ですが、聞き方としては、臨床試験とは何かご存じですか、治験とは何かご存じですかという形で別々に聞いております。臨床試験のほうを赤いバー、黒いバーが治験になっております。一番右が、説明できると答えている方。真ん中が、こういう言葉は聞いたことがあるよという方。一番左側が、聞いたことがないという方です。そうしますと、説明できるとお答えいただいた方が

スライド - 07

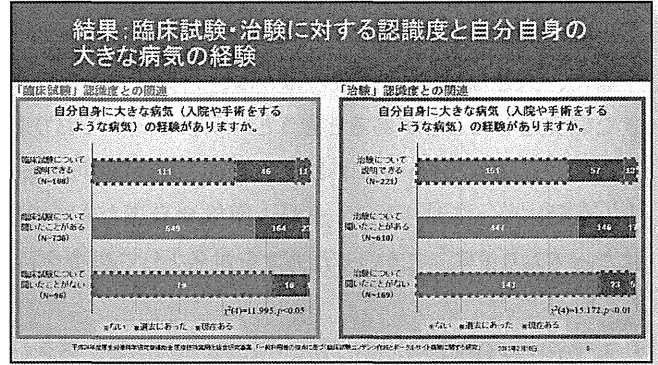


大体2割から2割弱。聞いたことがあるという方が、治験だと6割、臨床試験だと7割ぐらいの方は聞いたことがある。聞いたことがないという方が、治験ですと1割5分ぐらい。聞いたことがないというのが、臨床試験ですと1割の方という形になっておりました。今後の結果は、認識度の違い、すなわち、説明できると思っている方、聞いたことはあるなという方、聞いたことがないという方の3群に分けて、さまざまに検定をかけております。

【スライド - 08】

まず最初に、臨床試験・治験に対する認識度、すなわち先ほどの、説明できる、聞いたことはある、聞いたことがないという3群に分けて、その方々が実際に、自分自身大きな病気の経験があるかどうかということを検定にかけております。統計学的に有意に高い、比率が多いところを、ちょっと見にくいのですが赤い点線で囲っておりまして、統計学的に有意に低い、比率が低いというところは水色で囲っております。左側のオレンジ色のほうが、臨床試験を知っている、説明できる、聞いたことがある。右側は、治験に関して聞いております。

スライド - 08

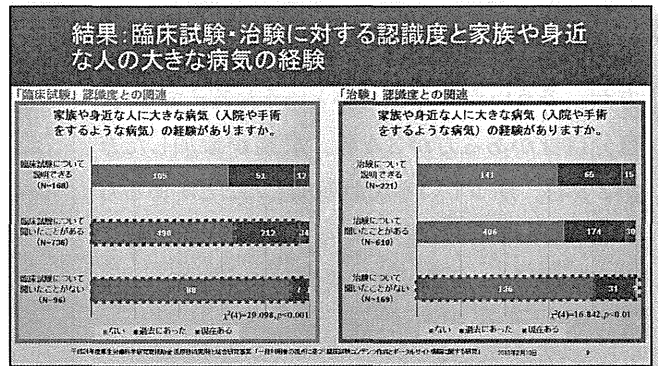


おおよその結果は、臨床試験と治験のほうで同じような結果が出ておりますので、少しまとめてお話をさせていただきますが、治験・臨床試験について説明できると答えた方では、過去に大きな病気の経験がない方が少ないという結果になりました。また、大きな病気の経験をしたことがあると言った方のほうが、自分自身は説明できると思っている方が多いという結果になりました。逆に、臨床試験・治験について聞いたことがないという方は、自分自身の病気の経験もない方が多い。病気の経験があるほうが、臨床試験や治験について知っている、自分自身思っているという方が多いという結果になりました。

【スライド - 09】

また、こちらのほうも、身近な家族ですとか、友人・家族といった方に病気の経験がある、ないということだと、臨床試験について聞いたことがないという方は、身近な人も病気の経験がないという方が多いということがわかりました。

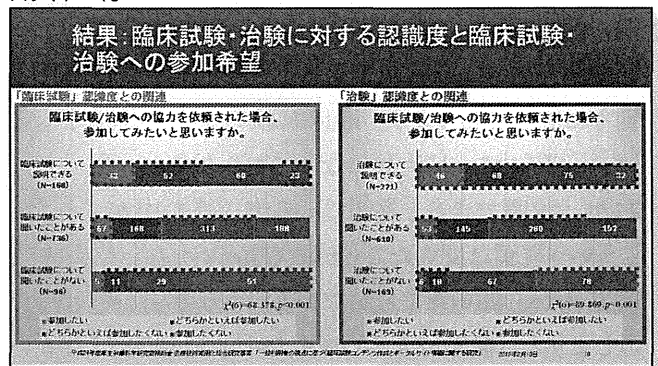
スライド - 09



【スライド - 10】

次に、これは仮にはあるのですが、自分自身が臨床試験や治験に参加の協力を依頼された場合に、参加してみたいと思いませんかというように形で聞いております。そうしますと、臨床試験の認識度・治験の認識度ともに同じような結果が出ているのですが、臨床試験・治験について説明できると自分で思っている方というのは、どちらかというに参加したい、参加してもいいよという比率が高い。また、臨床試験・治験について聞いたことがある、言葉ぐらいは知っ

スライド - 10

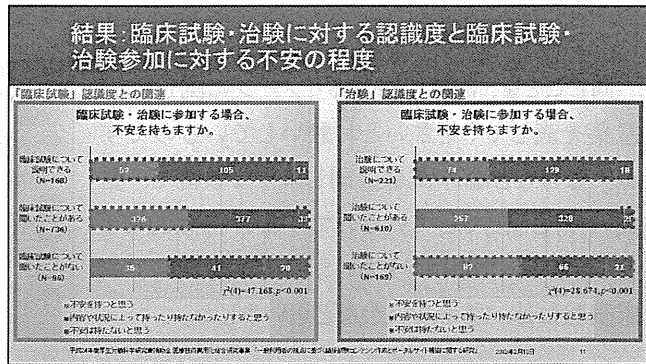


ているよという方は、どちらかといえば参加したくない。臨床試験・治験とかあまり知らないという方は、参加したくないと答えていらっしゃる方が多かったという結果になっております。

【スライド - 11】

また、これも仮にということになるのですけれども、臨床試験・治験に参加するとした場合に、不安を持ちますか、持つと思いますかという形で聞いております。そうしますと、面白い結果だなと思ったのですが、臨床試験や治験について説明できると自分で思っている方は、内容や状況によって、そういう不安を持つたり持たなかったりすると思うというような答えが、一番比率が多いということになりました。実際、治験や臨床試験に参加する場合は、内容によってももちろん不安を抱く程度とかは違うとは思いますが、まさに現実的なというか、本当に内容によってそれは違うんだと、説明できるという方はそのように思っているという形になりました。また、聞いたことがあるという程度の人だと、不安を持つかなという人のほうが多くて、逆に、臨床試験・治験について聞いたことがないという方は、不安は持たないという方が多いという形になりました。説明できる方というのは、それなりに本当に知っているのかなというような結果が得られたということになります。

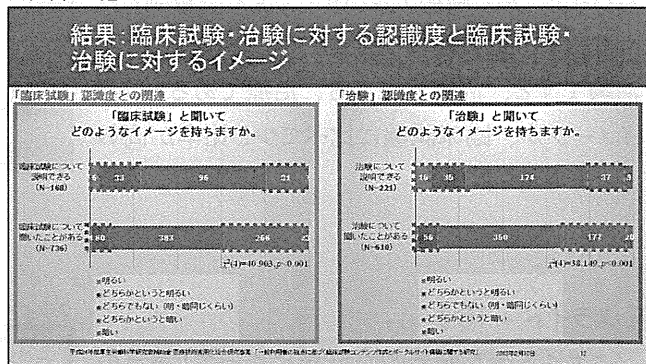
スライド - 11



【スライド - 12】

またこちらは、臨床試験と聞いてどういうイメージを持ちますか、治験と聞いてどういうイメージを持ちますかと聞いた結果になります。こちらのほうは、聞いたことがない方は、イメージはあまり湧かないかなと思いましたが、臨床試験や治験について説明できる、聞いたことがあるという方に対して質問をしているのですが、臨床試験や治験について説明できるという人は、どちらかというとも明るい、明るいというイメージを持っている方が比率として多い。また、臨床試験や治験について聞いたことはあるという程度の人だと、どちらかというとも暗いイメージを持っているという人が多いということがわかりました。

スライド - 12



【スライド - 13】

また、臨床試験や治験のイメージを言葉で表してくださいとお願いをして、自由記述で書き込んでいただいたものを、簡易的にカテゴリー化して似たような言葉を集めるというような分析を行って見たところ、こちらが出現数なのですが、実験である、あと人体実験である、実験と人体実験は分けてみたのですが、これらの言葉をイメージする方が多いという結果になりました。また、新しい薬や治療法の開発だろうと

スライド - 13

カテゴリー	カテゴリーを構成する言葉	n
実験	実験、テスト、試し、試験、試す、	236
人体実験	人体実験、実験台、モルモット、	175
新薬・新規治療法	新薬、薬、新薬開発、	78
不安・恐怖	怖い、不安、こわい、	64
希望・期待	希望、未来、期待、	38
発展・進歩	発展、進歩、前進、	35
危険	危険、危険性、	20
動物実験	マウス、動物実験、動物	16
必要	必要、必要なもの、	16
患者・病気	病気、患者、死、難病、	15
治療	治療、治療法、	12
暗い	暗い、灰色、薄暗い、	12
難しい	難しい、難	10
副作用	副作用、後遺症、	10
未知・不確実	未知、不確実、不確定、	10

結果：臨床試験に対するイメージを表す言葉